

欧米人名の命名法について

西澤 秀正

1 欧米人名の研究の意義

人名は、書物に、新聞に、テレビに必ず出てくるほど、われわれの生活に非常に身近なものであり、われわれの知識の大部分が人名と掛り合っているものである。それにもかかわらず、人びとは人名そのものに対しては極めて関心が薄い。それというのも、人名はわれわれが必要とする知識なり、情報なりに従属的に出現している場合がほとんどであるからであろう。しかし、実際にその知識なり情報なりを探索したり、記録したりする場合には、人名たりといえども、的確な知識が要求されるものである。

現在わが国では、欧米人によるあらゆる部類の著作が非常に多く翻訳され、また、研究されている。それが単行本として発表されたり、学術雑誌などに掲載されたりしている。従って、われわれは文献探索などの目的で、欧米人名を用いて各種の書誌、目録または事典類を検索せねばならない機会も多くなっている。

欧米人名については、その形態や命名法が、わが国と異なり、また言語や文字の相違なども加わって、欧米人名による文献探索は意外と厄介な問題が内在している。

人の名前は、わが国では、氏名とか姓名とかの用語で呼ばれ、また姓については、名字（または苗字）とか、氏とかのように、各種の用語で呼ばれている。欧米でも同様に、種類の用語で呼ばれている。

現在欧米人の名前は、通例、名の部分と姓の部分から成り、名の部分が前に、姓の部分が後に置かれ、わが国の名前の順序と反対である。名は個人に

つけられ、姓は家につけられ、すなわち親から子へと継承され、姓の部分から検索されることでは、わが国と同様である。但し、ハンガリー人は、日本人や中国人と同様、姓と名の順序で表記される。例えば、「ハンガリー狂詩曲」などの作曲で有名なリストは、リスト・フェレンツ Liszt Ferencz であり、姓と名の順序である。また、アイスランド人は、世界でも珍しい姓のない名前前で表記されている。すなわち洗礼名としての名を持ち、その後に分の父親の名を属格にして、それに男の子の場合は、-ソン -son (息子の意)、女の子の場合は、-ドティール -dottir (娘の意) なる接尾辞を付加して姓の代りに用いる。いわゆる父称 (patronymics) を採用している。例えば、父の名前がマグヌス・ヨーンソン Magnus Jónsson であり、息子の洗礼名がステファーン Stefán、娘の洗礼名がオーラフィア Ólafía である場合、息子の名前は、ステファーン・マグヌッソン Stefán Magnússon、娘の名前は、オーラフィア・マグヌスドティール Ólafía Magnúsdóttir となる。従って、この姓めいた呼び名は、代代変ることになる。

名は、通常その人の出生時に与えられるが、姓より「前にある名」という意味で、英語ではフォーネーム (forename) と言われている。キリスト教徒の子は洗礼のときに名が付けられるので、特に洗礼名 (baptismal name) またはクリスチャン・ネーム (Christian name) とも呼ばれている。アメリカでは、「名前の一番先に置かれる名」の意で、ファースト・ネーム (first name)、または「本人に与えられた名」ということで、ギブン・ネーム (given name) とも称せられている。クリスチャン・ネームは必ずしもキリスト教徒でなくても、あるいは洗礼を受けなくても、このような名が付けられるので、ファースト・ネームとかギブン・ネームとかと言われるものと同じことになる。

姓は、サーネーム (surname) または家名 (family name) と言われている。アメリカでは、「最後に置かれる名」の意で、ラスト・ネーム (last name) とも称せられている。

さらに、ファースト・ネームとラスト・ネームの間にある名という意味で、ミドル・ネーム (middle name) と称する名がある。この名は、すべての人が皆保持しているわけではない。これの無い人も少なくない。ミドル・ネームはファースト・ネームと並んで、第二の名として命名されたり、保持されたりするので、セカンド・ネーム (second name) と言われる場合もある。

英語では、姓に対する個人の名を特に個人名 (personal name) と称することがある。欧米人は、この名がその人の出生時の命名のときから複数命名されていたり、また婦人が結婚により夫の姓を名乗ると同時に、自己の名の部分に実家の姓を付加して表記したりする。また姓の部分では、しばしばハイフン、接続詞、前置詞 (前置詞と冠詞、またはその縮約形を含む。) を用いて、また時にはその何れも用いずに、複数の姓が連結されているもの、いわゆる複合姓であったり、前置詞や冠詞等の前置語を伴う姓であったりする。複合姓については、出生時から保持している場合、または結婚により夫の姓若しくは妻の姓を自己の姓に付加して、名乗っている場合等がある。

わが国の名前は、現在では、一つの姓と一つの名から成る完全な単姓単名制である。これに対して、欧米では、複名複合姓である場合がしばしばである。

欧米人の名前が略さないで、完全な名前が表示されているとき、この略さない名前を英語ではフル・ネーム (full name) と称する。このフル・ネームが、しばしば複数の名の何れかを省いたり、名をイニシアル (かしら字) で表示されたりする場合がある。わが国は単姓単名制であるから、フル・ネームとかフル・ネームでないとかの考えがなく、これに対する日本語の用語もない。

複名複合姓の欧米人名について、どの部分が人名保持者の姓であり、名であるかを識別することは容易でない場合がある。

本稿では、欧米人名、主として英米人名の命名法や形態について、著名な小説に登場する人物の名前や著名な著作者の名前を参照しながら、その一端

を調べてみたい。

2 イギリス小説に登場する人物の名前及び作家の名前について

イギリスの小説家、劇作家で、「月と六ペンス」、「お菓子とビール」等の作品で知られるサマセット・モームは、世界の小説の中から、その代表的な小説を10篇選び出したが、その中にエミリ・ブロンテ作の「嵐が丘 (1847)」が挙げられている。(注1)

この作品の舞台は、イングランド北東部のヨークシャー、時代は18世紀の終りから19世紀の初め、アーンショウ家(嵐が丘)とリントン家(スラシュクロス屋敷)の二つの家族の三代にわたる歴史が語られているので、登場人物の命名の在り方を知るには、誠に好都合である。この三代にわたる登場人物の系図を次に掲げ(注2)、登場人物に対する作者の命名法を探ってみたい。

アーンショウ家
The Earnshaws

(嵐が丘)

祖 父 1777 死
||
祖 母 1773 死

兄 ヒンドリ・アーンショウ
Hindley Earnshaw
1784 死

※3
ヘヤトン・アーンショウ
Hareton Earnshaw
1778 生

フランセス・アーンショウ
Frances Earnshaw
1778 死

妹 キャスリン・アーンショウ
Catherine Earnshaw
1784 死

※2
キャスリン・リントン
Catherine Linton
1784 生

リントン家
The Lintons

(スラシュクロス屋敷)

祖 父 1780 死
||
祖 母 1780 死

兄 エドガ・リントン
Edgar Linton
1801 死

妹 イザベラ・リントン
Isabella Linton
1797 死

※1
リントン・ヒースクリフ
Linton Heathcliff
1784 生 1801 死

ヒースクリフ
Heathcliff
1802 死

上掲の系図の※1のリントン・ヒースクリフの名は母方の姓であり、姓は父方の姓である。※2のキャスリン・リントンの名は母の名である。※3のヘヤトン・アーンショウの名前は、先祖の名前と同名である。(注3)

また、イギリスの小説家ダニエル・デフォー作の小説「ロビンソン・クルーソー」の作品の主人公の名ロビンソンは、母方の姓であると、作品中に次のように出てくる。(注4)

「私は1632年、ヨーク市に生まれた……父がプレーメン生まれの外国人で……ヨークに住みついた……この町の出身である私の母と結婚した……母の実家はロビンソンといふ、土地の名望家であった。そういうわけで私は初めロビンソン・クロイツナーエル(筆者注, Robinson Kreutznaer)と呼ばれていたが、イギリスによくある訛りのおかげで今ではクルーソー(筆者注, Crusoe)とわれわれ一家のものはよばれるようになった。いや、自分でそうよびもし、署名もするようになった……」

次に、「嵐が丘」の作者エミリ・ブロンテの父母、兄及び姉妹の名前を調べてみたい。(注5)

1812年 父 Patrick Brontë と母 Maria Branwell 結婚

1813年 長女(姉) Maria Brontë 誕生

1815年 二女(姉) Elizabeth Brontë 誕生

1816年 三女(姉) Charlotte Brontë 誕生

1817年 長男(兄) Patrick Branwell Brontë 誕生

1818年 四女(本人) Emily Jane Brontë 誕生

1820年 五女(妹) Anne Brontë 誕生

長女の MARIA は、母の名と同じであることは、「嵐が丘」の登場人物のキャスリン・リントンと同様のケースである。長男のファースト・ネームのパトリックは、父の名である。また、ミドル・ネームは、母方の姓であり、姓は父方の姓を受け継いでいることは、「嵐が丘」の登場人物のリントン・ヒースクリフや「ロビンソン・クルーソー」の主人公の名前と全く同一の命名の

され方である。

かような親の名や母方の姓等の命名は、17、8世紀からビクトリア朝時代のイングランドでは、一般に行われていたことがうかがえる。

次に、上述のブロンテ家族の長男パトリックと四女エミリは、セカンド・ネームとして、ミドル・ネームが命名され、ともに誕生の洗礼のときに命名されている。パトリックは母方の姓を命名されているのに対して、エミリは同種類の洗礼名を重ねて命名されていることの相違がある。すなわち、パトリックのミドル・ネームには、もともと姓である名前が命名されているのに対して、エミリのミドル・ネームには、もともと名である名前が命名されていることの相違がある。

エミリの名前は、事典、辞書類には、フル・ネームで表記されている場合が多いが、著者名として、また文献のタイトルとして表示されているときは、ミドル・ネームのジェイン Jane は省略され、エミリ・ブロンテ Emily Brontë と表記されている場合が多い。(注6)

エミリ・ブロンテ作の「嵐が丘」を激賞したウィリアム・サマセット・モーム William Somerset Maugham の名前は、パトリック・ブランウェル・ブロンテと同一形態の名前である。このモームの名前は、事典、辞書類には、フル・ネームで表記されている場合もあるが、著者名として、また文献のタイトルとして表示されているときは、その多くは、ファースト・ネームの William が W. のイニシャルで表示されているか、またはこのイニシャルの W. をも省略されて、Somerset Maugham という形態で表示されている。(注7)

イギリスの劇作家、小説家、批評家で、またノーベル文学賞の受賞者でもあるバーナード・ショーのフル・ネームは、ジョージ・バーナード・ショー George Bernard Shaw であるが、ショー自身 G. Bernard Shaw と署名し(注8)、また晩年には、ファースト・ネームのイニシャルの G. をも省略して Bernard Shaw と称したことも似ている。

また、アメリカの小説家、社会批評家であるジェイムズ・フェニモア・クーパー James Fenimore Cooper (1789-1851) は、ニュージャージー州バーリントンの旧家の生まれで、ミドル・ネームの Fenimore は母方の姓で、このミドル・ネームを名乗るようになったのは、1826年から数年間ヨーロッパに滞在したときからである。(注9) このクーパーの著作の全集が1891年に、Works of J. Fenimore Cooper (注10) と題するタイトルで刊行されている。このタイトルの中のクーパーの名前も、モーム等の名前と同じく、ファースト・ネームは J. のイニシャルで表示されている。パトリック・ブランウェル・ブロンテ、サマセット・モーム、バーナード・ショー、クーパー等の名前のミドル・ネームは、何れも同一性格のものであり、エミリ・ブロンテのミドル・ネームのジェインとは性格を異にするものである。

欧米人名を的確に認識し、識別するためには、もう少しこのミドル・ネームについて検討する必要がある。

3 ミドル・ネームの命名または名乗りについて

ヨーロッパにおけるミドル・ネームの命名または名乗りは、二つの方式によって、行われている。その第一の方式は、ファースト・ネームと並べて、もう一つの名を付け加えるものである。さらに、この名には二種類あり、その一つは、母方の姓等、元来は姓である名前を命名または名乗るものである。その例として、前述した次のような名前が挙げられる。

Patrick Branwell Brontë

William Somerset Maugham

George Bernard Shaw

James Fenimore Cooper

もう一つは、洗礼名等元来は名である名前を重ねて用いるもので、前述した Emily Jane Brontë の名前を挙げることができる。この二種類の名前は、何れも同一のファースト・ネームとラスト・ネームの保持者の間で、他の人

と当人を区別する名として、大いに役立ったことは言うまでもない。

第二の方式は、ファースト・ネームに並べて、父親の名を示す、いわゆる父称 (patronymics) を用いるものである。すなわち、父親の名に息子を意味する接尾辞を付け加えたものである。この父称は、同名の他の人と当人を区別するために用いられるようになったものである。これは、現在ロシア人の名前に見られるものである。ロシア人の名前は、三つの部分から成り、ファースト・ネームの名、ミドル・ネームの父称及びラスト・ネームの姓から成る。父称は、父親の名に-ovまたは-evを付加し、さらに接尾辞-ichを付して作られる。(但し、これは男子の場合であり、女子の場合は、名・父称・姓のすべてが女性形語尾を採り、-ichは-naと変化する。) 例えば、文豪トルストイの名前は、レフ・ニコライエヴィチ・トルストイ Lev Nikolayevich Tolstoy (注、キリル文字のものをラテン文字に翻字せるもの) であり、トルストイの父のファースト・ネームはニコライ Nikolay であることが確認できるわけである。ロシアでは、知人同士で呼称するとき、名と父称だけを用いるのが普通である。ちょうど、姓を持たない前述のアイスランド人の名前と同一形式のものである。但し、ロシア人の場合は、ラスト・ネームとしての姓を保持していることが異なる。

第一の方式と第二の方式のミドル・ネームについては、ファースト・ネームとラスト・ネームの間に置かれている名であるという外形的形態は全く同じであるが、本質的には全く相違するものである。それは、この名前の発生経過が異なるからである。すなわち、第一の方式のミドル・ネームは、ファースト・ネームとラスト・ネームの発生以後、その中間名として発生し、家柄を誇示する等の理由から、母方の姓等を命名または名乗られたものであり、同時に同一名の他の人と当人を区別するために役立てられたものである。これに対して、第二の方式のミドル・ネームを用いるロシアでは、ラスト・ネームの姓の発生以前に、すでに現在ミドル・ネームである父称が用いられており、名と父称で呼称されていた。ところが父称だけでは、父

親との関係しか明示しえず、家系または家を誇示または明示するためには、不都合であったため、家名たる、すなわち継承される姓が必要となり、姓を採用するようになって、この姓を父称のあとに付け加えて表示するようになったものである。

この父称の命名は、ロシア人やアイスランド人だけの習慣ではなく、印欧語族全般にわたる習慣である。印欧語族では、この父称を用いて自己の名と他の名とを区別する方法を早くから採用しており、この父称が自己の名の添名 (byname) または綽名 (surname の原義) として用いられていたが、やがてこの父称が親から子へと継承され、家に固定されて家名 (family name) として確立されるに至った。現在では姓 (surname) と家名 (family name) の区別がなくなってしまった。現在では父称から発生した近代姓は欧米各国に見られる。これの表現形式は、父祖の名に接頭辞または接尾辞を付加することが最も顕著な特徴であり、各民族はそれぞれ独自の接頭辞または接尾辞で表現した。もちろん、この接頭辞または接尾辞が省略されて父祖の個人名そのままの場合もあり、また父祖の名の属格形による曲用の場合もある。印欧語族のほとんどの民族は、個人の名に付加する添名または綽名としての父称を近代姓に発展せしめ、近代姓の一種類を生み出したのである。これに対して、ロシア人は添名または綽名としての父称をそのまま存続せしめ、これを現在のミドル・ネームの位置に置き、ラスト・ネームの姓を別個に発達せしめたことの相違がある。また、アイスランド人は、父称を未だ添名としての性格のまま用いており、従って親から子へと継承されず、その個人に密着した名前であり、世代が代るごとに変る名前である。

次に、第一の方式のミドル・ネームの場合、その命名または名乗りの時期に二とおりある。その一つは、出生時の洗礼等のとき命名されるものであり、他は婦人が結婚後ミドル・ネームとして、すなわち夫の姓の前に表記される実家の姓であり、実家の姓と夫の姓とが並んで表示されるものである。また、時には人生の途中必要に応じて、母方の姓等を名乗るものもある。前述の

James Fenimore Cooper はこれに類するものである。

前者の出生と同時に命名されたものの例としては、前述の Patrick Brantwell Brontë, William Somerset Maugham, George Bernard Shaw 等である。

後者の例としては、「アングル・トムの小屋」の作者で、アメリカの女流小説家ハリエット・エリザベス・ビーチャー・ストー Harriet Elizabeth Beecher Stowe (1811—1896) の名前である。Beecher は実家の姓である。未婚時代の名前は、Harriet Elizabeth Beecher であったが、1832年 Calvin Ellis Stowe と結婚して、Harriet Elizabeth Beecher Stowe となったわけである。ストーの未婚時代のミドル・ネームで、第二の洗礼名である Elizabeth は、フル・ネームとしては表示されるが、普通は表記されない。これは Emily Jane Brontë の Jane と同様のケースである。この種のミドル・ネームは省略されて表記されることが多い。ストーの名前の表示について、事典、辞書類には、次のように種類の形式で表示されている。

Stowe, Harriet Elizabeth Beecher (注11)

Stowe, Harriet (Elizabeth) Beecher (注12)

Stowe, Harriet Elizabeth, *nee* Beecher (注13)

但し、著者名として、また文献のタイトルとして表記されているときは、Harriet Beecher Stowe と表示されるのが通例である。(注14)

イギリスでミドル・ネームを使用する習慣が普通になってきたのは、19世紀になってからのことである。18世紀には、劇作家・政治家であり、風習喜劇の傑作で知られるリチャード・ブリンズリー・シェリダン Richard Brinsley Sheridan (1751—1816) であるとか、イギリスの女流作家で、怪奇小説「フランケンシュタイン」等の著作で知られるメアリ・ウルストンクラフト(ゴドウィン) シェリー Mary Wollstonecraft Godwin Shelley (1797—1851) の母であり、“Vindication of the rights of woman.”の著作で知られるメアリ・ウルストンクラフト・ゴドウィン Mary Wollstonecraft Godwin (1759

—1797) 等の名前がわずかに見られる。Sheridan のミドル・ネームの Brinsley は母方の姓であり、Godwin のミドル・ネームの Wollstonecraft は、実家の姓で、William Godwin と結婚後、ミドル・ネームとして旧姓を保持したものである。イギリスでは、17世紀以前には、このミドル・ネームを保持する名前は、ほとんど見受けられない。ドイツでは、イギリスよりも早くこのミドル・ネームの習慣が行われていた。

アメリカにおいては、1620年メイフラワー号でアメリカに渡り、プリマス植民地を建設した102名のピルグリム・ファーザーズの中には、ミドル・ネームの保持者は一人もいなかった。さらに18世紀の中頃に至るまで、ミドル・ネームの使用は、ほとんど行われなかった。アメリカの初代から第17代までの大統領のうち、ミドル・ネームを保持していたものは、第6代、第9代及び第11代の3人の大統領だけであるが、第18代大統領 Ulysses Simpson Grant (1822—1885) から現在の第40代大統領 Ronald Wilson Reagan (1911—) までについてみると、逆にミドル・ネームを保持していなかったものは、第23代、第25代及び第26代の3人の大統領だけである。現在ではミドル・ネームを保持しない人は少数になるほどに普及した。その一方では、この三つの名前をフル・ネームで併記する煩しさを避ける動きがあり、その方法として、このミドル・ネームをイニシアルで表記する習慣が生じ、アメリカ人の名前の表記の特徴となった。その一例として、第35代アメリカ大統領であったケネディの名前が挙げられる。そのフル・ネームは、John Fitzgerald Kennedy であるが、ケネディ自身ミドル・ネームの Fitzgerald を F. のイニシアルで署名し、またケネディ関係文献のタイトルでも、そのように表示されている。(注15) ケネディのミドル・ネームの Fitzgerald は、母方の姓で、母はボストン市長をながつとめた父を持つ名家の出であった。ミドル・ネームをイニシアルで表記する極端な一例が、第33代アメリカ大統領トルーマンの名前でも、そのフル・ネームは Harry S Truman であり、ミドル・ネームの S はイニシアルではなく、レターの S 1 字の名である。

従って省略を示すビリョードは必要としないものである。

これに対して、イギリスでは、ミドル・ネームだけをイニシアルとする習慣はない。もし名前をフル・ネームで表記せず、イニシアルを使用するときは、ファースト・ネーム、ミドル・ネームともにイニシアルとするか、または時にはファースト・ネームのみをイニシアルとする方法が行われている。前者のファースト・ネーム、ミドル・ネームともにイニシアルとする方法が広く行われている。この方法で表記されている著名なイギリスの文学者、小説家、社会学者であり、「世界文化史大系 The outline of history.全6巻」等の著作で著名な H. G. ウェルズのフル・ネームは、Herbert George Wells (1866—1946) であるが、文献のタイトルとしては、H. G. Wells と、また「チャタリー夫人の恋人」等の小説で知られる D. H. ロレンスのフル・ネームは、David Herbert Lawrence (1885—1930) であるが、文献のタイトルとしては、D. H. Lawrence と、それぞれファースト・ネーム、ミドル・ネームともにイニシアルで表記されているのが通例である。(注16) また、ウェルズ自身も、H. G. Wells と署名している。(注17) イギリスにおいて、ファースト・ネームのみをイニシアルとし、ミドル・ネームは略さない場合は、恐らくミドル・ネームが母方の姓等の家柄等を示すもの、すなわち洗礼名等の名ではなく、本来姓である名前であるときに、行われるのが、その主なるものであろう。その例として、前述した W. Somerset Maugham, G. Bernard Shaw 等が挙げられるであろう。また、前述の J. Fenimore Cooper はアメリカ人であるが、ミドル・ネームの Fenimore の使用は、1926年から数年間欧州に滞在したときからであることは前述したとおりであるが、ファースト・ネームを J. のイニシアルで表記したのは、恐らくはドイツやイギリスの影響を受けたものであろう。アメリカでは、ケネディの名前の表記にみられるように、そのミドル・ネームの Fitzgerald は、母方の家柄を示す姓であるが、このミドル・ネームのみをイニシアルで表記するのに対して、イギリスでは、モーム等の名前に見られるように、ファースト・ネームのみ

をイニシアルとし、ミドル・ネームは略さないで表記することの習慣の相違は、やはり実用性よりも、格式を重んじるイギリス人気質と、庶民性、実用性を重んじるアメリカ人気質の相違からくるものと思える。

さらに、イギリスでは、前述のとおり、W. Somerset MaughamやG. Bernard Shawの名前のように、ファースト・ネームのみをイニシアルとするような不恰好で、実用にも不便である表記法には、やがて抵抗を感じ、このイニシアルも省略して、ミドル・ネームとラスト・ネームのみで表記する風習も生じた。

次に、ファースト・ネームとラスト・ネームだけの名前の場合には、ファースト・ネームをイニシアルで表記するという名前は、現実には見受けられない。かような形式の名前は、他の名前との識別が困難となるからであろう。アメリカの作家で、「賢者の贈りもの」、「20年後に」、「最後の一片」等の代表作で知られるオー・ヘンリーO. Henry (1862—1910) は、本名は、William Sydney Porterであるが、公金横領の罪名で服役し、出所後は前科者という過去を知られるのをひどく恐れていたと言われることから、O. Henryのような、つかみにくい筆名で押し通したものと思われる。オー・ヘンリーの著作を検索するとき、O. Henryで検索するのか、またはHenry, O.で検索するのかとよく問われるところである。

欧米では、名の部分に家系、家柄等を表示したいという願望から、ミドル・ネームに元来姓または家名である名前を表示することについては、前述したとおりであるが、同じく姓の部分にも、かような表示をする風習が、欧米において広く行われている。特にラテン系の言語の国民において顕著である。かような姓は、母方の姓、妻の姓、名付け親 (godfather) の姓等の各種の名前を父方の姓と並べて、連結された姓を形成する場合である。かような姓を複合姓と称し、形態としては、ハイフン、接続詞または前置詞 (前置詞と冠詞及びその縮約形を含む。) によって連結されたもの、またはその何れも用いずに連結されているものである。

イギリスの軍人で、ボーイスカウトの創設者であり、「スカウティング・フォア・ボーイズ (Scouting for boys) ボーイスカウト日本連盟訳」の著作で知られるベイデン＝ポーエルは、乃木將軍とも交友があり、日本の武士道精神の理解者でもあり、来日したこともあるが、このベイデン＝ポーエルのフル・ネームは、Robert Stephenson Smyth Baden-Powell (1857—1941) である。ベイデン＝ポーエルの姓は、Baden-Powell であり、ハイフンで連結された複合姓となっている。その由来は、父 (オックスフォード大学の学監) の名前が Baden Powell であり、父のファースト・ネーム Baden と ラースト・ネーム Powell を連結して複合姓を形成している。ベイデン＝ポーエルの名付け親は、著名なエンジニアであった Robert Stephenson (1803—1859) であるが、この名付け親の名前がそのままファースト・ネームとセカンド・ネームとなり、さらにヴァージニアのジョン・スミスの傍系の子孫であり、ネルソン提督の後裔でもある母の実家の姓 Smyth がサード・ネーム (第3の名) となっている。(注18) かように、ミドル・ネームの部分も、複数の名前から成っている場合がある。

わが国の名前は、現在では、単姓で単名であるが、ベイデン＝ポーエルの名前にも見られるように、欧米人名は、名の部分については、ファースト・ネームのほかに、セカンド・ネームを保持しており、時にはサード・ネームまたはそれ以上の名を保持する場合もあり、また姓の部分については、二つまたはそれ以上の姓を連結された複合姓である場合がある。かような欧米人名を的確に認識し、識別するためには、さらに複合姓を検討する必要がある。

4 複合姓について

前節で述べたとおり、複合姓とは、母方の姓、妻の姓、名付け親の姓等、各種の名前を父方の姓と並べて、連結された姓と、定義付けしたとおりであるが、連結される名前は各種のものがある。例えば、さきに例示した Baden-Powell なる複合姓は、前述のとおり、父の名と姓による複合姓であ

る。この父の名である Baden の由来を尋ねれば、あるいは母方の姓、祖母の姓等であり、前述のデフォールの小説「ロビンソン・クルーソー」の主人公の名前のロビンソンと同じ性格のものであるかもしれない。

複合姓を構成要素の観点から定義付けすると、二つ以上の実詞（名前）によって構成された姓と称することができる。その多くは、実詞と実詞との間に、それを連結することを示すハイフン、接続詞または前置詞（前置詞と冠詞、またはその縮約形を含む。）を有し、時にはその何れも用いずに連結されている場合もある。

1 ハイフンで連結された複合姓

a Philip John Noel-Baker (1889—1982)

イギリスの政治家、世界平和・軍縮運動家で、1959年ノーベル平和賞の受賞者でもあるノエル＝ベーカーは、妻の姓 Noel と自己の姓 Baker とを連結して、1926年頃から Noel-Baker という複合姓で名乗るようになった。（注19）

b Emanuel Haldeman-Julius (1889—1951)

アメリカの出版者、作家であり、1919年以降“Little Blue Books”なる10セント文庫本の出版で有名なエマヌエル・ホルドマン＝ユリウスは、1916年 Marcet Haldeman と結婚し、妻の姓 Haldemen と自己の姓 Julius とを連結して、Haldeman-Julius という複合姓で名乗るようになった。（注20）ホルドマン＝ユリウスの著作における著者名の表記の一例を示すと、次のとおりである。

The first hundred million; by E. Haldeman-Julius. New York, Simon and Schuster, 1928.

c Edward Albert Sharpey-Shafer (1850—1935)

イギリスの生理学者で、William Sharpey の弟子であるエドワード・アルバート・シャーピー＝シェーファーは、恩師の姓 Sharpey と自己の姓 Schäfer とを連結して、Sharpey-Shafer という複合姓で名乗るよ

うになった。(注21)

2 接続詞で連結された複合姓

この形態の複合姓は、英米の慣習にはなく、ドイツ、オーストリア、スペイン等に見受けられる。特にスペインにおいて顕著である。

a Lulu von Straus und Torney (1873—1956)

ドイツの女流詩人であるルール・フォン・シュトラウス・ウント・トルナイの姓は、Straus と Torney の名前をドイツ語の接続詞 und で連結された複合姓となっている。彼女の著作における著者名の表記の一例を示すと、次のとおりである。

Lucifer, Roman; von Lulu von Straus und Torney. Jena, E. Diederichs, 1924. 241p. 21cm.

b José Ortega y Gasset (1883—1955)

スペインの哲学者で、「大衆の反逆 La rebelión de las masas」等の著作で著名なホセ・オルテガ・イ・ガセの姓は、父方の姓 Ortega と母方の姓 Gasset とをスペイン語の接続詞 y (英語の and に当る) で連結された複合姓となっている。(注22) オルテガの著作の日本語翻訳書におけるオルテガの著者名の表記の一例を次に示すと、次のとおりである。

反文明的考察 ホセ・オルテガ・イ・ガセ著 西澤龍生訳 東京 東海大学出版会 1966 269p. 21cm

スペイン人の複合姓は、極めて複雑で特異である。その一例が、オルテガの複合姓に見られるものである。

3 前置詞または前置詞と冠詞もしくはその縮約形で連結された複合姓

Roger Martin du Gard (1881—1958)

「チボー家の人々」の作者で、ノーベル文学賞の受賞者でもあるフランスの小説家ロジェ・マルタン・デュ・ガールの姓は Martin du Gard で、フランス語の前置詞 de と定冠詞 le の縮約形 du (=de+le) で連結された姓となっている。マルタン・デュ・ガールの名前についてわが国

の翻訳書における表記の一例を示すと、次のとおりである。

アンドレ・ジイド＝ロジェ・マルタン・デュ・ガール往復書簡 1
ジャン・ドレ編・序 中島昭和，鈴木重生訳 東京 みすず書房
1971

4 ハイフン，接続詞等を用いずに連結されている複合姓

a Basil Henry Liddell Hart (1895—1970)

イギリスの軍事研究者，歴史家であり，第1次世界大戦史，第2次世界大戦史等の著作のあるバジル・ヘンリー・リデル・ハートの姓は，Liddell Hartで，ハイフン，接続詞等のいずれも用いずに複合姓となっている。リデル・ハートの著書における著者名の表記の一例を示すと，次のとおりである。

History of the Second World War (by) B. H. Liddell Hart. New York, Capricorn Books (1972) 2v. 21cm.

わが国の翻訳書における原著者名としての表記の一例を示すと，次のとおりである。

世界史の名将たち リデル・ハート著 森沢亀鶴訳 東京 原書房
1980 216, 10p 20cm

b David Lloyd George (1863—1945)

イギリスの政治家であるデヴィッド・ロイド・ジョージの姓は，Lloyd Georgeであり，Georgeは父方の姓，またLloydは母方の姓である。(注23)ロイド・ジョージの著書における著者名の表記の一例を示すと，次のとおりである。

Memoirs of the Peace Conference; by David Lloyd George. New Haven, Yale University Press, 1939. 2v. 25cm.

あ と が き

欧米文献探索上，著者名の見地から，欧米人名主として英米人名について，

検討を試みたものである。今回は主として、ミドル・ネームの検討に主眼を置き、若干これとの関連において、複合姓についても、検討を試みたものである。

引用文献

- 注1 世界の十大小説 下 W. S.モーム著 西川正身訳 岩波書店 1960 (岩波新書)
- 注2 「嵐が丘 上 エミリ・ブロンテ作 阿部知二訳 岩波書店 1960 (岩波文庫)」p.10の日本語の系図と、「Wuthering Heights; by Emily Brontë, with introduction and notes, by Minoru Toyoda. Tokyo, Kenkyusha, 1923. (Kenkyusha English Classics)」p. xxivの英語の系図とを合作したものである。
- 注3 注2の岩波文庫p.24(“玄関口に入るまえに、私は立ちどまって、家の前面、とくに正面の大扉のあたりに、多くの怪異な彫物が、いちめんに群がっているのを嘆賞したが、その上の方の、こわれかかった怪獣や裸の行儀の悪い童形が入りみだれるなかに、「一五〇〇」という年号と「ヘヤトン・アーンショウ」という名とが、目にとまった。”)及びp.66(“ぼくは、嵐が丘の玄関のうえに「アーンショウ」と彫られているのを見た。古い家柄なのかね”)の両文章から、登場人物のヘヤトン・アーンショウは、先祖の名前を命名されたことがうかがえる。
- 注4 ロビンソン・クルーソー 上 デフォー作 平井正穂訳 岩波書店 1967 (岩波文庫) p.11
- 注5 The dictionary of national biography. vol. 2: Beal-Browell. London, Oxford University Press, 1917. p.1314.
- 注6 *The life and eager death of Emily Brontë, a biography*; by Virginia Moore. Haskell, 1971.
- 注7 *W. Somerset Maugham and the quest for freedom*; by R. L. Calder. Heinemann, 1972.
- Somerset Maugham and his world*; by Frederic Raphael. Thames and Hudson, 1976.

- 注8 「Saint Joan; by George Bernard Shaw, with introduction and notes, by Tsuneo Aoki. Tokyo, Kenkyusha, 1930.」の口絵に“G. Bernard Shaw”なるショー直筆サイン図版を掲載
- 注9 世界伝記大事典 世界編 3:カークリ 東京 ほるぷ出版 1984 p.416
- 注10 *Works of J. Fenimore Cooper*. New York, P. F. Collier, 1891. 10 volumes.
- 注11 *The encyclopedia Americana*. International edition. vol. 25. p.765.
- 注12 *The Oxford companion to American literature* [by] James D. Hart. 4th ed. New York, Oxford University Press, 1980. p.812
- 注13 *The Webster's new biographical dictionary*. p.953
- 注14 *Harriet Beecher Stowe: the known and the unknown*; by Edward C. Wagenknecht. Oxford, 1965.
- 注15 *A thousand days: John F. Kennedy in the White House*; by Arthur M. Schlesinger, Jr. Boston, 1965.
- 注16 *Arnold Bennett and H. G. Wells: a record of personal and literary friendship*; ed. by Harris Wilson. Hart-Davis, 1960.
D. H. Lawrence: a collection of criticism; ed. by Leo Hamalian. McGraw-Hill, 1973.
- 注17 「Tono-Bungay; by H. G. Wells, with introduction and notes, by H. Watanabe. Tokyo, Kenkyusha, 1932.」の口絵に“H. G. Wells”なるウエルズ直筆サイン図版を掲載
- 注18 *The dictionary of national biography*. 1941-1950. p.34
- 注19 *The Webster's new biographical dictionary*. p.740
- 注20 *The Webster's new biographical dictionary*. p.438
- 注21 *The Webster's new biographical dictionary*. p.909
- 注22 大衆の反逆 オルテガ著 寺田和夫訳 (『世界の名著 56』 p.551)
- 注23 *The dictionary of national biography*. 1941-1950. p.515